

## 第2回 知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム

### 【実施報告書】



平成 30 年 11 月

一般社団法人全日本知的障がい者スポーツ協会

**ANISA**  
All Nippon ID Sport Association

## はじめに

「第2回知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム」は、2015年9月に行われた第4回INASグローバルゲームスに日本より参加した5競技団体（バスケットボール、フットサル、卓球、陸上競技、水泳）に対して、韓国選手団代表より日韓スポーツ交流プログラムの提案があり、アジア地域における知的障がい者スポーツの発展に日本と韓国が互いに協力していくことで合意し交流が始まりました。昨年の第1回目のプログラムは日本で開催され、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会及び全国特別支援学校知的障害教育校長会よりご後援をいただき、またスペシャルオリンピックス日本及び日本体育大学のご協力の下、多くの企業様のご協賛もいただきました。更には通訳を含む多くのスタッフや学生ボランティアの方々のご協力やご尽力のおかげで成功裡に終える事ができ多くの交流が行われました。

第2回目の今回は、韓国ソウル市で盛大に行われ、第1回目同様に選手同士が交流を深め、スタッフもお互いに指導方法など情報交換を行うことができました。

一方、本プログラムのような草の根的活動は日本政府が進める Sport for Tomorrow<sup>\*</sup>の精神に準拠したスポーツ国際貢献事業であり、高く評価されています。とりわけ日本におきましてはスポーツを通じた知的障がい者スポーツの普及・発展に寄与することはもとより、知的障がい者スポーツの価値を高める活動として一翼を担い得る事業であると思います。

最後に、「第2回知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム」の韓国派遣につきまして多くのスポンサー企業様、関係団体の皆様の多大なご協賛ご尽力に深く感謝いたします。そして韓国の全ての皆様にも心から感謝し、この貴重な経験をこれからの知的障がい者スポーツの発展に努力したいと考えています。

来年度は第3回目として日本での開催となり他の国からも問い合わせを頂くなど注目が集まっております。アジア地域の知的障がい者スポーツの普及、振興に繋がるよう私たちも更に精進し邁進してまいります。

第2回知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム日本選手団  
団長 荒井秀樹

\*）東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年までに、官民連携のもと、開発途上国を中心とした100カ国・1000万人以上を対象に推進されるスポーツ国際貢献事業です

## 1. 日程

<11月2日(金)>

07:30	羽田国際空港集合
09:45～12:15	羽田国際空港発→金浦国際空港着(KE2712)
12:30～14:00	昼食(バス内)
14:00～14:30	ホテルチェックイン
14:30～15:00	移動
15:00～17:30	コンディショニングトレーニング(日本選手団のみ)
17:30～18:00	移動(ホテルに戻る)
18:30～19:00	移動(ソウルオリンピックパークテル)
19:00～20:30	レセプション

<11月3日(土)>

08:30～09:00	メイン会場へ移動(韓国体育大学へ)
09:15～12:30	交流プログラム(1)各種目におけるプレゼンテーション
12:30～14:00	昼食
14:00～14:30	各会場へ移動
14:30～17:30	交流プログラム(2)各種目別親善試合
17:30～18:00	夕食
18:30～20:00	本部スタッフ MTG

<11月4日(日)>

09:00～09:30	観光地移動
09:30～12:30	文化交流プログラム(1)景福宮
12:30～14:00	昼食
14:00～14:30	観光地へ移動
14:30～16:00	文化交流プログラム(2)明洞周辺
16:00～17:30	金浦国際空港へ移動
19:30～21:45	金浦国際空港発→羽田国際空港着(KE2711)

## 2. 帯同医師

上記交流会にチームドクターとして参加した。

以下、事前準備、大会中の活動、および、今後への展望を記載する。

### ■事前準備(メディカルチェック)■

参加選手の健康状態や服薬状況を調査するため、競技団体を通じてメディカルチェックシートを配布し回収した。渡航、およびスポーツ活動行うために支障がある選手、またはWADAのドーピングコントロールに違反する選手はいないことを確認した。

### ■プログラム期間中の活動■

#### ①選手、スタッフへの医療的行為

- ・虫歯による痛みに対して投薬(選手)。
- ・頸椎の痛みに対して投薬(コーチ)
- ・頭痛に対しての投薬(役員)
- ・怪我や病気は発生しなかった。

#### ②セミナーでのプレゼンテーション

”How about participating in INAS and Para competitions?”という題にて、INASやIPC主催の国際大会に出場するには、障害があることを証明する書類を提出し認定されること、パラ競技ではさらに競技会での検査を受ける必要があることを解説し、まずは、INAS競技への参加を促した。

#### ③バスケットボール試合への帯同

バスケットボールは練習場が確保できず、また試合運営スタッフを主催側が全く用意していなかった。それでも、約1試合行い、今後の競技レベルの交流の促進を約束した。

#### ④その他気がついたこと

体調管理については、食事、睡眠、休養が大切である。今回は、休養日に暴食をする者があり、トップアスリートとしての自覚を促す指導が必要であった。

### ■今後の交流プログラムの展望■

①各競技に充てられた試合時間は約半日ときわめて短いものであったが、練習時間も含め、競技種目ごとの交流が活発に行われた。今回行われた競技に関して、各競技ごとの交流が期待できる、

②次回は、今回参加しなかった競技にも参加を呼びかけ、交流を広げていくことが重要である。

③また、次回は日本開催なので、各競技とも複数のチームを作り、多くの選手が国際試合を経験できるようにすることも考慮すべきである。

④試合、練習以外に、参加者全体を対象としたINASでの競技性の高いスポーツ活動に対する理解を深めるようなセミナーは続けるべきであろう。

⑤海外からの参加者を対象とした文化視察行事も検討されるべきである。

チームドクター宮崎伸一(精神科医)

### 3. 各競技団体より

#### <バスケットボール(報告者:谷口 英謙氏)>

##### 1 実施した交流プログラム内容

9:30～12:10 全体研修会

14:30～17:00 日本 選手8名 スタッフ2名 韓国 選手7名 スタッフ1名 通訳1名

14:30～ ミーティング チームアップ

15:30～ 親善試合 10×4

17:00～ 交流 コート内で会食

17:30～ 移動

##### 2 得られた成果

今年度、日本FIDバスケットボール連盟の育成行事として2回の合宿を経て、今回学生選抜として国際試合ができたことはとても大きな成果と考える。国内の学生としては、レベルの高いパフォーマンスができ、それなりに結果が残せた。交流という観点からも国際交流や経験がない選手も試合やその後の会食等、言葉が分からなくても、選手同士接することができた。また、スタッフも通訳を介しながら、日本、韓国の現状や課題、今後の展望など話し合うことができた。

##### 3 全体を通して(まとめ)

今回、バスケットだけ会場の都合で前日練習が出来なかった。2日目の午前中に全体で各競技研修会が行われ、コーチとしては各競技の情報が分かり大変役にたったが、当初予定していた、交流の練習時間がなくなってしまったのはとても残念であり、次回行うのであればプログラムの工夫が必要である。また、研修場所から会場も遠く、親善試合の会場もかなり小さなコートで実施し、審判、オフィシャル等の人員配置がなく、練習試合になってしまった(コートは縦4～5m短く、審判は日本のコーチ1名で対応、オフィシャルは通訳が実施)。いろいろな都合で日程が変更になり、正式タイムではないがゲームができたのでよかった。今後、正式なゲームが実施できることを期待したい。

##### 4 今後の課題や展望

昨年より韓国チームと3度交流をしているが、韓国チームは経験を重ねるごとに力をつけてきていることを実感した。今後、日韓交流戦をどのようなチーム編成で挑むのか検討することが必要となっている。時期的なことも視野に入れ、交際試合はコーチ、選手とても貴重な経験なので、今後も有意義な交流にしていきたい。



## <陸上(報告者:田中大介氏)>

### 1. 実施した交流プログラム内容

今回の内容はホスト国である韓国が主導で行うことになった。また、選手たちの年齢やコンディションなどを考慮して陸上競技の基礎的な動きを中心に行なっていくことになった。

14:20 練習開始

・ウォーミングアップ

(全員で jog2 周、ストレッチ、ダイナミックストレッチ、リズムドリル)

・プライオトレーニング

(バウンディング 5 歩・10 歩、ミニハードルジャンプ前後左右(3 足長)、ツースキップ左右足切り替えスプリントドリル(3 足長)前後左右 2 本)

・コアトレーニング

(メディスンボールフロント・バック投げ 各 10 本、体幹補強)

スタートダッシュトレーニング(20 メートルダッシュ)

ミニゲーム (フラフープを使ったマス取りゲーム)

4×100mR (日本韓国ミックsteam)

17:30 練習終了

17:40 記念撮影・プレゼント交換

### 2. 得られた成果

韓国選手だけでなくご家族や地元コーチの方が見えて終始アットホームな雰囲気の中で練習が行われた。そのため日本選手もすぐに雰囲気に慣れることが出来た。また、韓国コーチが元オリンピック選手でポイントを分かりやすく教えてくれることや韓国コーチが韓国語で話して通訳者が日本語に訳して説明してくれるという普段あまり無い経験が選手にとっては話をより聞いて理解するという意識になり、とても貴重な体験となった。

### 3. 全体を通じて(まとめ)

・今回韓国の大学や高校の充実した施設を利用させていただいて選手のモチベーションも高まった。特に高校に全天候型トラックがあることに驚かされた。また、その施設を一般人も気軽に利用できるということであった。

・交流練習前日に韓国側のコーチが様子を見に来て、事前に選手のコンディションや当日行う練習の内容を話すことができ、意思疎通が行えた。そのため日本選手にも早めに内容を伝えることができ安心できた。また、交流練習前日の夜にレセプションがあり、選手同士でコミュニケーションを取る機会があったため選手達も積極的にジェスチャーで伝えたり、覚えてたの韓国語で会話をしたりして当日も友好を深めることができた。

・選手達は普段と違う土地や言語の違い、食文化の違いに少々気疲れする様子もあったがこれから世界で活躍することを期待している選手達にとってはとても良い経験になった。

#### 4. 今後の課題や展望

- ・選手自身が行なっている練習の紹介を選手同士で各国紹介できると良い。今回、各国の指導方法をコーチがプレゼンテーションをしてとても参考になった。選手同士でも各競技で集まりディスカッションなどがあるとより交流が深まると感じた。
- ・両国の選手やコーチの写真や年齢、記録、練習スケジュールについて事前に内容を確認できるともっとスムーズに打ち解けることができる。
- ・今回の交流プログラムだけで終わることなく、inas 世界大会やグローバルゲームスなどで会えることを期待したい。また、日本で開催されている日本 ID 陸上競技選手権大会などに招待して大会でも交流を深めていけると良いと感じた。
- ・他団体の様子も見に行く余裕があると良かった。宿泊先では他団体の選手と話をする機会があつて良かった。実際に日本選手団内でも交流が深まると良いと思った。



#### <フットサル(報告者:木村純一氏)>

##### 1. 実施した交流プログラム内容

【午後】14:30～17:00(日本人選手 8 名、スタッフ2名、韓国人選手 9 名、スタッフ4名)

屋外(人工芝+ゴムチップ)フットサルコート 28m×15m

フットサルのプログラム内容は、当日のトレーニング開始前に通訳を通じて打ち合わせを行った。双方の力量がわからなかったため、「アップおよびトレーニング1を韓国チーム、トレーニング2を日本チーム主導で、最後のゲームのやり方は、途中で検討しましょう。」という提案を受け入れていただいた。韓国チームはジョン氏、日本チームは木村がメインの指導者となり、アシスタントに両国スタッフが入った。

「W-up」: コーディネーション

(①2 人組でボールを落とさないようにキャッチ②ランニングで DF 間を突破)

「TR-1」: パス～コントロール～シュートのドリルトレーニング

(①ドリブル突破②ワンツー③セカンドポスト)

「TR-2」: 数的優位のフィニッシュトレーニング

(20×12m、両ゴールを使い、2vsGK のカウンター、2vs1+GK のカウンター)

「GAME」: 日韓親善試合(20 分ランニングタイム×1 本) 日本 11-0 韓国

日韓交流戦(混合メンバーとし、20 分ランニングタイム×1 本)



## 2. 得られた成果

- 前日のレセプションで打ち解けた友好関係を、ピッチ上でさらに深めることができた。日韓の両選手・スタッフが、プレーを楽しみながら、一喜一憂し、感情を表現していたことはお互いの心に残る時間になった。
- 結果的にレベルの差はあったが、日本選手は「日韓戦(初の対外国)」ということ意識し、モチベーション高く取り組むことができていた。世界大会を目指す上で、近いとはいえ外国のチームと真剣勝負をする場は大変貴重であった。
- 両国の指導者が順番にトレーニングを指導したことで、練習メニューのみならず、目的やねらい、コーチングの質など、直接目にしなければ感じないものを経験することができた。韓国のジョン氏は、丁寧な説明と、「イエデヨ?(わかった?)」と何度も選手に確認し、最後には「よくできていたぞ!」と必ず褒めて、選手が自信を持ってプレーするように促していたのが印象的だった。

## 3. 全体を通じて(まとめ)

初対面であり言葉が通じないにも関わらず、身振り手振りや、スマートフォン等を利用して積極的にコミュニケーションをとる選手たちは本当に頼もしく、国際交流という観点からも非常に有意義なものだった。それだけに、ピッチ上でプレーできる機会が1回だけではなく、2~3セッションあるとさらに良かったと感じる。二日目の午前のプログラムは、指導者として期待が大きかっただけに、スケジュール、参加者、内容にも改善が必要だったように思う。貴重な機会のため、できる限り選手同士のプレーや交流の機会を確保していけると良い。

フットサル日本チームは2019年グローバル大会に向けた強化の一環として、事前合宿(1泊2日)を行ってから遠征に参加した。フットサル競技としては初の交流であったが、何より交流がスタートしたことが重要だと思う。より質の高いプログラムにしていきたい。

## 4. 今後の課題や展望

日本はサッカーが2002年から、フットサルは2015年から連続して国際大会に出場しており、韓国チームは2010年のサッカー世界選手権を最後に国際大会には出場していない。今回の交流をきっかけに、ともに世界を目指し、アジアで切磋琢磨していく仲間となっていくことを望む。ただし、韓国側に強化の狙いがあるのか、あくまでも交流の一環なのか、このプログラム自体の目的によって取り組み方にも大きく影響する。実際に、フットサルの公式ピッチは屋内(フローリング)で40×20mだが、今回は屋外(人工芝)で28×15mと、国際基準には程遠いものだった。ピッチが滑るため、日本選手は現地でシューズを借りてプレーしなければならなかった。できることならば世界大会を基準にして取り組んでいきたい。多くのご支援、ご協力のもと、フットサル競技は初めて参加させていただき、大変感謝いたします。今後、参加国を増やしながらか、より質の高いものにしていくために、参加者としてもこのプログラムの実施に貢献していきたいと思う。





## ＜卓球(報告者:長田拓也氏)＞」

### 1. 実施したプログラム内容

11月3日

午前:9:00~12:15 各種目日韓両国によるプレゼンテーション

午後:14:20~14:50 日本対韓国による練習(10分×3ローテーション)

親善試合(団体戦形式)男女各シングルス4試合ダブルス1試合

#### ＜男子結果＞

木下 0-3 崔在賢 木下 3-2 金徳怜 ダブルス 0-3

山岸 0-3 崔在賢 山岸 0-3 金徳怜

#### ＜女子結果＞

川崎 3-0 姜瑞賢 川崎 3-0 申娜諧 ダブルス 3-1

松井 0-3 姜瑞賢 松井 2-3 申娜諧

### 2. 得られた成果

今回、知的卓球の日本選手団は海外遠征初参加の選手が男女とも1名ずついた中で、その選手たちには国際大会に参加する前に非常にいい経験になったように思う。特に男子の山岸選手は18歳と今後の活躍が期待できる選手であり、そういった意味で今回このような形でアウェーでの卓球というものを体験できたのは今後の彼の成長を大きく助けるものと思う。

男子の韓国側の選手は国際大会にも出場履歴のある選手であり、そういった選手と対戦することができたのは大きかったように感じる。交流の中で男子のほうに先に試合を消化してしまったため、手ほどきという名目で帯同スタッフの長田が現地のエース選手と対戦を行った。時間の関係上1-1の状態を終了したが、十分研究はでき、今後の対策に役立てられると思う。

女子は接戦ではあったものの海外経験の豊富な川崎選手が初参加の松井選手をうまくリードし、ダブルス勝利へと導いていた。松井選手自体もプレーは悪くなかったが、相手のほうが環境への適応やその他総合的に上回っていたように感じる。

### 3. 全体を通じて(まとめ)

今回、私自身初めて知的の選手と海外に同行させていただき様々な学びがあった。特に2日目午前中のプログラムでは各種目ごとの特性や課題、また韓国側の卓球チームの研究内容等を学ぶことができたため、まずは直近の合宿にてアウトプットできたらと思う。ただ、午前のプログラムはスタッフもしくは各種目の代表者のみとし、選手は別の場所で体を動かすようなことができたほうがよかったように感じる。午前中の選手の様子を見ると、前日の移動疲れからか寝てしまっている子や、座りっぱなしの状態に我慢ができず、会場の外にいる子の姿がちらほら見られた。また、初日は練習の予定がなかったにも関わらず、到着後に卓球場を用意していただき、調整の場を設けていただいたことに深く感謝申し上げる。選手の中には翌週にスペイン遠征を控えたものもあり、多少の時間でも練習を行えたことは非常に意味があったと感じた。

### 4. 今後の課題や展望

まず技術的な部分から申し上げますと、今回韓国側の選手は男女計5名の選手すべてが異質型のイレギュラーなプレーヤーであった。そのため日本選手は対応に時間がかかり、本来の実力が発揮できず終わってしまったと感じていた。しかし国際大会の場面では所見でこのようなイレギュラープレーヤーと対戦することは想定できることと、今後新人として出てくる選手の中に、そういった特徴を生かして勝ち上がってくる選手がいる子とも大いに考えられる。その点に関して日本の選手は対応力の遅さや、やりづらさから落ちたモチベーションを再度上げるといったところに課題を感じた。これは選手の取り組み姿勢もそうだが、スタッフのケアの仕方次第で対処できる場合もあるため、今後そういった研究が必要であるように考える。

また、今回初めてこのプログラムに参加させていただいたわけだが、来年は日本で開催と伺っている。解団式の時にも仰っていたように、日韓のみならず、参加国を増やし、包括的なプログラムにしていただけたらと感じた。また、本プログラムは INAS エントリーがまだの選手でも海外を体験できるというところに大きな魅力を感じている。大事な国際大会に初めて参加する前に海外という環境になれる場としても本プログラムは非常に有効であると感じた。そういった意味でも、2か国による1年ごとの行き来だけでなく、参加国を増やし、海外に遠征できる機会を増やしていただけたら非常にありがたい。

終わりに、今回のプログラムに向けてご尽力賜りました ANISA スタッフの皆様、スペシャルオリンピックコリアのスタッフの皆様に深く敬意と感謝を申し上げます。今後も障がい者スポーツ活躍の場の発展にご尽力いただき、当連盟といたしましても微力ながらお力添えさせていただければと思います。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



## 6. 総括

「第2回 知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム」は、日本側から総勢 37 名(本部スタッフ: 3 名/医師: 1 名/コーチ・アスリート 33 名(バスケットボール 10 名、卓球 6 名、陸上競技 7 名、フットサル 10 名)が訪韓し、3 日間の全日程を大きな怪我等も無く終えることができた。

さて、2 回目の開催となった同プログラムだが、第 1 回目同様に、両国の献身的な努力により、成功裡に終える事ができた。特に今回に関しては、スポーツ交流プログラム以外にも、両国の指導者による指導方法の共有という新たなプログラムを導入した事は、両国にとって大変有意義なものとなり、より充実したプログラムであったと実感している。

ただ第 1 回目同様に、競技レベルをどの様に考え、ある種調整をするのかなど、課題が無いわけではない。事前に事務方レベルでは、各人のこれまでの記録などをお互いに提示するなどして、できるだけプログラム自体に大きな影響が無い様に心がけていたが、いくつかの競技においては、その辺りが浮き彫りとなった事は否めない。しかしながら、そもそも同プログラムは「交流」という言葉が示すとおり、競技会という要素は排除されているので、その点においては、一定の価値の共有がなされたものと感じている。

また文化的交流に関しましても(3 日目)、韓国側の事前の準備が行き届いており、大きな混乱もなく観光などを楽しむことが出来、派遣者全員、韓国文化に十分に触れることが出来たのではないだろうか。

一方、同プログラムは、INAS アジアという視点からも注目されており、既に、シンガポールにおいては、同プログラムへの参加の意向を示している。そこで、今回現地に於いて韓国側とも協議し、第 3 回目からは日韓両国ではなく、アジア全体で実施できるように「第 3 回知的障がい者アジアスポーツ交流プログラム」として、新たな一歩を踏みだそうという事で、両国は一致した。この事は、今回の事業の一環でもある「Sports for tomorrow」の考えに準拠しており、日本としてはアジアにおいて、リーダーシップを取れるように引き続きけん引していきたいと考えている。

最後に、このプログラムを実施するにあたっては、支援企業様(個人含む)、関係団体、協力団体をはじめ多くの方のご協力とご尽力があつての事と改めて心より感謝申し上げます。

事務局長 斎藤 利之



□フォトギャラリー□

<p>レセプション (両国感謝状授与)</p>	<p>レセプション (日本荒井団長)</p>	<p>レセプション (韓国高団長)</p>
<p>レセプション全体 (全参加者)</p>	<p>レセプション全体 (集合写真)</p>	<p>プレゼンテーション (新規プログラム)</p>
<p>陸上競技 (交流プログラム)</p>	<p>卓球 (交流プログラム)</p>	<p>バスケットボール (交流プログラム)</p>
<p>フットサル (交流プログラム)</p>	<p>観光地 (文化交流プログラム)</p>	<p>解団式 (羽田交際空港)</p>

## 【支援企業様(順不同)】

株式会社運動通信社様

株式会社デンソー様

株式会社パレンテ様

株式会社アクトス様

株式会社グロリアツアーズ様

株式会社 JTB 様

株式会社エスプールプラス様

ぜんち共済株式会社様

NANJ 株式会社様

ROUTEF株式会社様

日本生活協同組合連合会様

日本ユース旅行株式会社／ジャムジャムエクスプレス様

株式会社スポーツマネージメント様

株式会社三晃社様

美留町 弘様

### 【後援】

公益財団法人日本障害者スポーツ協会日本パラリンピック委員会

※当事業はSFT認定事業です。